

環境史から見た川利用と都市

岡山大学教授 小野 芳朗

今日は、歴史や文化への配慮にこだわってお話したいと思っています。そこで具体的な事例があるとい
いと思いましたので、岡山市にあります西川用水と、後樂園の水の話をしたしたいと思います。

排水路の里川化

最初に西川用水ですが、これは排水路が里川
化した例になります。江戸時代、川の両側は屋敷
になっていましたが、戦後、特に昭和 40 年代に
美化運動が始まり、西川の両側が緑の植生で埋
められるようになりました。その外側は住宅地で歓
楽街がありますが、川辺は整備されていて、水に
近づきやすい仕組みも出来ています。しかし実
際の西川は水の流れが急で、近づくと非常に危
ないのが実態であります。

岡山には江戸時代、池田家というお殿様の資
料がたくさんあります。それを見ますと岡山は、かつてあった堀が、現在は道路になっているのが特徴です。
かつて城の外濠だった柳川線という道路には、最近では地下に合流式の下水道が出来ています。堀が道
になって、下水道になっています。西川は岡山城から見て、柳川線の外側にある川になります。

江戸時代の西川大用水の周辺図を見ると、両側に沿ってたくさんの家が並んでいることが分かります。宝
永5年に描かれた地図を見ますと、そこには例えば池田刑部下屋敷とか浅野弥助とか武家の屋敷が並んで
いることが分かります。西川は、現代では里川のひとつに数えられると思いますが、こうした絵図をみると、こ
こは排水路だったと思います。井戸の水を飲んでいて、台所用水や風呂の排水が入っていたと思いま
す。しかも紙漉き場があったことも、これらの絵図から分かりますので、汚染度はかなり高いと思います。ドブ
川だった可能性もあります。

近代以後、正確には調べられていませんが、この西川は風景化してきます。岡崎市長と三木知事が、昭
和40年代に里川化したのです。この2人の経歴を見ますと水道局と厚生省出身の方で、排水機能を意識し
ながらやったのではないかと思います。ですから現在、里川化してはいるのですが、水の流れは非常に急
で、雨が降ると全く近づけない状況があるのだと思います。

次に京都の堀川の例を紹介します。これは里川が排水路化したという例です。江戸時代の堀川は用水で
して、ここで洗濯したり、近くに茶道の家元もありますので、この水を飲んでいたと思います。明治 28 年に、
琵琶湖疏水の分線が出来まして、この堀川に琵琶湖の水が流れるようになります。戦時中に軍部が一部を
埋め立てたために枯渇して、現在もこのままになっています。また岡山の城の堀と同様、この下には合流式
の下水道が出来ています。その下水道の一部は、元の堀の機能を使って建設されたと聞きました。良く考え
てみれば、この堀は外敵から守る機能はなく、ある意味では排水路として機能していたため、恐らく美しくな
かったと思います。周りに家が立っていますから、その排水が流れてきていたと思います。それが近代にな

岡山市西川用水 排水路の里川化

昭和2年 岡山電気軌道柳川線開通
昭和44年 西川流域美化運動
昭和49年 西川緑道公園整備始まる 鯉と白鳥
昭和53年 枝川緑道公園整備
昭和55年 西川上流公園整備
平成元年 市制100周年 堂の沢、水車設置
平成3年 灯籠流し
平成10年 フリーマーケット

って、臭いものには蓋をしますか、衛生の視点から埋め立てられていき、道路になったと思います。しかしそこは土地の中では一番低いところですから、そこに下水道が建設しやすいというケースかもしれません。

後楽園の事例に見る記憶の再生

二番目の話題は岡山の後楽園です。「後楽園」は明治になって付けられた名前です。元々は岡山城の後ろにあった庭ということで「御後園」と言いました。ここでお話するのは、水辺の空間の乾燥化です。

水田は里山や里川とセットの生態系で、タニシやヤゴやメダカといった生態系の命が住む風景であり、我々日本人にとっては人生の舞台と言えます。どなたにも、この水田風景は、どこかで記憶にあると思います。それではなぜ後楽園という大名庭園を例に取ったかと言いますと、江戸時代の記憶を辿り、その頃にどのような水田の風景があったのかを実証するための資料が残っていたからです。



この庭園の中では、農民が入り込んで、水田をたくさん作っていたという話がございませぬ。しかし現在の後楽園は「眺める対象」という、歴史的な脈とは違うものになっています。稲を作ることが生活行為の投射体であったものが、現在の眺めになった。言い方を換えますと、かつてはウェットな場であった。ジメジメしたと言ってもいいかもしれませんが、そこに色々な生物がいて、あるいは人もいて、騒々しく触れている場であった。もう少し進めて言いますと、さまざまな生物の声や田作業の歌がひびく「声が広がる空間」という艶っぽい表現になるかもしれません。それが乾燥した場、客体化して流れる風景になった例をお話します。

後楽園は、日本三大名園のひとつとして位置づけられておりまして、芝生がたくさんある公園として有名になっております。上空から見ますと、真ん中に池があって、周りに芝生が生えていて、一部に水田が残っています。この中に水をどうやって引いたかと言いますと、祇園用水という疏水を使っていました。祇園用水は現在使用されておらず、旭川に流されていて、後楽園とは独立しています。かつてはこの用水の出口から御後園に水を引き入れる、かなり長い木製のサイホンがあったことが資料に残されています。ところが現在、この用水は目的が無く使用されていませんので、排水路化しています。上流に遡って行きますと、水辺の生活の痕跡が未だに残っています。現在はここで地下水を汲み上げて、庭園内の水に使っています。当時の絵図面に載っている水車も復元されています。流れが遅くなって、水温が高くなってしまったため、夏になると大量のアオコが発生するのが、現在の後楽園の悩みであります。

また園内には「流店」という変わった建物がありまして、2階部分が庭園を眺めるようなつくりになっていて、1階部分は吹き抜けになっています。曲水がこの中を流れていきまして、庭園史によりますと、こういった石があることで流れを演出すると書かれています。

元禄時代に出来ました御後園は、用水を引っ張ってきたため、かなりの水の量がこの中に引き込まれていたことが予想されます。というのは、これは灌漑用水が目的だったからです。江戸時代は灌漑用水を引く技術が長けていて、その技術が庭園用水に採用されたのではないとも言われています。享保年間の御後園の図を見てみますと、ほとんど水田になっていて、先ほどの水が灌漑用水であることが分かります。そして幕末・文久3年の図を見ますと、一部水田がなくなり、その部分が芝生に変わっています。このように、ついこの間までは水田がたくさんあった、つまりもっとジメジメした空間であったということが分かります。

御後園には殿様が御成りになられたときの記録が、「御後園諸事留帳」という日記として残っています。この中の元文4年5月23日には、次のように記録をされています。

「来る廿三日、御後園ニ而御座候、早苗乙女拾五人、男五人、しろかき老人、名主老人罷出候様」

「早苗乙女拾五人」とありますが、実はこれが誰かも分かっています。お百姓さんなので苗字はありませんが、お殿様のお目見えですから、10ぐらいの村から選りすぐりの方々が集まったのではないかと思います。また「男五人」というのは、歌を唄う男です。声のいい、歌の上手な方が来られたと思います。

「廿三日、田植、四時揃(午前9時)、四半時植懸ル、厚木平弥召連、罷出ル、九前(正午)ニ植仕廻、流店之下ニ而洗足仕ル、延養亭東前出シ、北へ寄踊申事、十廻り」

先ほどの「流店」は、実は足洗い場であったということが分かります。風景として見ると非常にいい構造物で、何か風流なことをやったのではと思ってしまいますが、実は足洗い場だった。たまたまお殿様が来た、田植え始めの時の儀式ですのでこう書いていますが、毎日農民が入って足を洗っていた。この農民は、御後園が雇っている農民です。

同じような記録が延享元年にも出てきます。

「殿様(池田継政)、四半比被遊御入、延養亭ニ

而御膳召上、田植並早乙女おとり御覧、御意ニ而(機嫌が良い)、延養亭真東ノ上ニ而、間近ク半時余おとる、(中略) 殿様久振ニ御見物被遊、益御機嫌宜、八半時御立、右御祝儀ノ御吸物可被召上旨、先達而被仰出、御吸物ノ鯛みそ断置、(越しみそ、御熨斗少胡麻塩付、白餅米、御赤飯、御酒)

御田植候者へ、男女共先格之通、御用所ヨリ拵、赤飯・御酒遣ス、仕廻ニおとり候事如例、両奉行、下奉行御用所四カ所ニ而おとる」。



この奉行とは御後園の奉行で、彼らもお酒をいただき、気持ちよくなりまして、農民と一緒に踊ったという記録が残っています。

今度は宝暦3年。

「九ツ時、殿様被為入、御膳廻ル、御田植被遊御覧、御入早速御田植はしめ、九ツ半比、田植済、延養亭 東南ノ方へ寄、芝ノ上早乙女とも、おとり候事二廻り程」。

10年前は十廻りですが、景気が悪くなりまして、だんだんと減ってまいります。「早乙女とも御田植済、前々之通流店にて洗足致ス」とありますので、やはり足を洗っていたようです。今年は7月2日に再現をしまして、歴史通り、田植後流店で足を洗っていました。

この水田が段々と芝生になったのは、お金がなくなって農民たちを雇えなくなったため、水田経営をやめていったからです。芝生になっていきますと、風景になっていきます。しかしあまり楽しい風景ではありません。今さら田んぼにしても仕方がないのですが、この風景は元々ウェットな空間であったということも言いたかったのです。

ここは日常はさまざまな生き物の声でやかましい、あるいは男と女が歌を唄っていたので艶っぽい空間であったのではないかと思います。しかし、近代以降こういった能動的風景が受動的風景になってきて、水の量も減ってアオコが発生する。眺める風景ですから、流れる水は富栄養化しては困るというように変わってきたことが分かります。

現代の後樂園は、夏の夜になると幻想的にライトアップされています。これは歴史的な文脈にありません。また「三河の八橋」のように、「杜若」の故事に倣った風景も作ってあります。これは日本人が共有している物語という風景です。その他、鶴がいたり、お正月になりますと鷹狩で取った鶴を食べたのですが、現在はそのようなことはありません。また仏教的空間でもあったのですが、蓮の池があり、夏の朝の4時になると、市民の方が見に来ます。このように、現在では見るものになっています。

今日は、歴史と文化に配慮することにこだわってお話をしましたが、こういった記憶の再生、あるいはウェットな空間の再生は可能なのでしょうか。歴史的な文脈が支持されればいいのですが、文献が残っている場合にはある程度再現は可能です。しかし人間は非常に分かりにくい生物です。分かりやすい生き様はしません。一方で人間は意味づけをしないと生きていけません。排水路であった川に意味づけをすると里川になったという例を話しましたが、意味と言いましても、新しい伝説を作ることは出来るのでしょうか。これが今日のひとつの課題になると思いますが、自発的な歴史の始まりを後押しするような論理があるのでしょうか。私は先ほどから記憶とか感性という言葉を多用していますが、川といいますが水は水の物体ではなく、場に付着した記憶を持っています。人間が身体と心の両方で、どちらかが無くなったら人間ではなくなると同じように、自然や風景も両方の側面を持っています。モノとしての景観という体も持っていますし、心、これは記憶だと思いますが、これも持っています。そのモノと記憶が交錯する場になるのでしょうか。音と匂い、艶っぽい空間を演出していければいいなと思います。